

研究報告

COVID-19 流行後初年度の小児病棟での 実習方法の工夫と評価

Ingenuity and Evaluation of Nursing Practicum in Pediatric Ward
in the First Year of COVID-19 Pandemic

小西美樹 玉村尚子 越雲美奈子
Miki Konishi Hisako Tamamura Minako Koshikumo

獨協医科大学看護学部
Dokkyo Medical University, School of Nursing

要 旨

【目的】 COVID-19 流行後の初年度となる臨地実習に制限が生じた中で、小児看護学実習における学習状況を把握するため、実施した看護技術、患者理解、実習目標達成の現状を調査する。また、学生がペアとなって同一の患者を担当する方法を取り入れ、協働したことによる学修効果を評価し、今後の実習指導体制について考察する。

【方法】 2020 年度小児看護学実習の受講生を対象にアンケートを実習終了日に実施した。回答があった 84 件を分析対象とした。

【結果】 病棟実習の日数は 57% が、学内実習の日数は 77% が十分だったと回答した。バイタルサイン測定は、ほぼ全員が実施していた。実施できた看護ケアは、遊びの提供 (76%)、おむつ交換 (61%)、沐浴 (32%) などであった。実習中に患者の家族に会えたのは 44% であった。患者理解は、疾患で 87% が、看護で 77% が、家族背景で 56% が、難しかったと回答した。実習日数減少による実習目標 5 項目の達成への影響度は、45~67% が影響したと回答した。病棟実習と学内実習の学生がペアで患者を担当したこと、病棟実習で学生がペアで患者を担当したことは、82% が学修効果があったと回答した。病棟実習と学内実習でのペア学習では、患者の理解度や、実習目標達成の影響度に有意な差は認められなかったが、病棟実習でのペア学習では、家族背景の理解度と、目標 5 「子どもと家族の関係性を考慮し、子どもと家族が療養生活に主体的に取り組めるよう援助する」への影響度において有意な差が認められた。

【考察】 学生が実施した看護ケアは、個人防護具が不要なケアに限定され、日常生活援助や治療に関わる援助技術の多くで実施率が低かった。小児患者の疾患や看護の理解は困難であったが、家族背景は、面会制限にあることを考慮し、実習指導者や教員が補足説明することで困難さが減じられていた。COVID-19 による実習目標の達成への影響は多大だが、学生がペアで協働する方法は一定の学修効果を得ていた。

キーワード：小児看護学実習、ペア実習、協働学習、COVID-19、授業評価

著者連絡先：小西美樹 獨協医科大学看護学部小児看護学
〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町北小林 880
E-mail : konimiki@dokkyomed.ac.jp

I. 緒言

新型コロナウイルス (COVID-19) は、2019 年 12 月に第 1 例目の感染者が報告されて以降世界的な流行となり、医療者教育にも大きな影響を与えている。日本看護系大学協議会が実施した 2020 年度 4 年生の実習科目に関する調査では、2020 年 4 月～7 月の期間に当初の計画通りに実習が実施できた大学は 1.9%にとどまり、計画を全て学内に変更した大学は 74.1%に上ったとされる (日本看護系大学協議会, 2020)。

本学の看護学実習においても 2020 年度は感染拡大の影響を受け、時間短縮や学内での実習への切り替えといった変更を迫られる状況となった。筆者らが担当する小児病棟での看護学実習においても、病棟内に立ち入りできる実習生数の制限が実習施設より要請され、実習指導体制の変更を余儀なくされた。グループの学生を病棟実習班と学内実習班に分け、病棟での実習を行う人数を半分に減らす措置をとったが、個々の学生にとっては 5 日間の病棟実習が 2 日半に短縮されることとなり、実習目標の達成が懸念された。そこで、同じグループの学生がペアとなって同一の患者を担当し、協働学習する方法を取り入れることとした。

文部科学省 (n.d) は、協働学習を「子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学び」と定義し、「学びのイノベーション事業」の中で提唱し、推進している。協働 (協同) 学習は、長らく初等教育での実践が中心であったが、21 世紀を迎える頃から大学への導入が盛んとなり、その勢いは増すばかりである (松下, 2015, p.114)。2012 年中央教育審議会答申 (2012) では「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修 (アクティブ・ラーニング) への転換」の必要性が述べられ、様々な教育技法を用いた学生の活動性を引き出す授業や学習環境づくりが求められている。

そこで、COVID-19 流行後の初年度となった 2020 年度に、臨地実習に制限が生じた中で小児看護学実習を経験した看護学生の実習状況をアンケート結果から把握することを目的に本研究を行なった。実習での看護技術の実施、受け持

ち患者の理解、実習目標の達成の現状を明らかにし、学生がペアとなって同一の患者を担当し、協働して学習する方法を取り入れたことによる効果を評価し、今後の実習指導体制について考察する。

なお、本研究では、協働 (協同) 学習を「同じ患者を受け持つ学生同士が同じ学修目標を達成するために共に学習すること」と定義し、「協働学習」と表記する。

II. 実習の概要

1. 実習目的と目標

「健康看護支援・健康障害看護援助論実習 II (小児期)」(以下、小児看護学実習) は、看護学部 3 年次開講の必修科目である。「子どもの成長発達過程やその特徴、発達段階を考慮した関わりへの理解を深め、実践する。また、健康障害が生じた子どもと家族が健康回復のために主体的に療養生活を構築することを支援する。これらの実践を通じて、子どもと家族を理解し、子どもと家族の看護に必要な知識・技術・態度を修得する。」を実習目的としている。病棟実習の目標は、「1. 子どもと家族の病気体験と療養生活について関心を持ち、子どもの権利を尊重し、子どもと信頼関係を構築する」「2. 子どもの成長発達を踏まえ、健康障害と日常生活へ影響を理解する」「3. 子どもの健康障害と発達段階の特徴を考慮し、日常生活の援助を行う」「4. 子どもの身体的・心理的苦痛を緩和し、安全に配慮した看護ケアを計画、実施、評価する」「5. 子どもと家族の関係性を考慮し、子どもと家族が療養生活に主体的に取り組めるよう援助する」の 5 つである。

2. 実習方法

小児看護学実習では、5～6 名の学生で 1 グループを形成し、2 グループが同時期に 2 週間の実習を行う。指導体制は、各グループに対して主に担当する教員を 1 名ずつ配置しているが、小児看護学領域教員全員が関わり、指導にあっている。実習場所と日数は、NICU 1 日、小児外来 1 日、保育園 2 日間、小児病棟 5 日間である。小児病棟は、小児がんや外科疾患を有す

る児が主に入院する A 病棟と、重症心身障害児や感染症に罹患した児が主に入院する B 病棟の 2 ヶ所で行い、5 日間同じ患者を継続して担当する。

感染拡大の影響を受けた 2020 年度は、NICU 実習は臨床指導看護師から説明を受けながら、30 分間、面会通路から見学し、視聴覚教材とカンファレンス、学内演習にて学習を深めた。小児外来実習は、視聴覚教材とカンファレンス、学内演習による実習とした。保育園実習は実習時間を 1 日 4 時間に短縮し、2 日間の臨地実習を行なった。

病棟実習では、1 日あたり受け入れ可能な実習生数に制限が生じたため、1 グループを更に 2 つの班に分け、病棟実習と学内実習に分かれることとした (表 1)。第 1 班は月曜午前、火曜、水曜は病棟実習、木曜と金曜は学内実習とした。第 2 班は、月曜午後、木曜、金曜は病棟実習、火曜と水曜は学内実習とした。病棟で実習する学生は、8 時から 15 時の実習時間で患者 1 名を担当し、看護過程を展開して看護実践を行った。学内で実習する学生は、患者の疾患や治療に関して机上学習し、患者のアセスメントと看護問題の抽出、看護計画の立案、必要な看護技術の演習を行った。各日の最後にはグループ全員でカンファレンスを行い、それぞれの実習成果を共有した。同じ患者を担当する学生同士はカンファレンス以外の自己学習時間にも協働学習を行うように促した。ただし、グループの学生数や担当できる患者数により、病棟実習日に学生 2 名で患者 1 名を担当するケース (表 1〈変則パターン 1〉) や、グループ内に同一患者を担当している学生がいないケース (表 1〈変則パターン 2〉) もあった。ペア学習対象の学生が存在しない場合、病棟での患者の様子や診療情報を教員が学生へ伝え、学習支援を行なった。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

2020 年度小児看護学実習の受講生。

2. データ収集方法

COVID-19 により臨地実習に制限が生じた

2020 年度の小児看護学実習における学習状況を把握するため、「コロナ禍による小児病棟実習方法の変更に関するアンケート」を小児看護学領域教員 3 名で協議して作成した。匿名アンケートとして学習管理システム (以下 LMS) 上に設定し、小児看護学実習の最終日に回答を依頼した。

データ収集期間は、2020 年 10 月から 2021 年 2 月であった。

3. 質問項目

「コロナ禍による小児病棟実習方法の変更に関するアンケート」の質問項目を表 2 に示す。実習病棟、病棟実習と学内実習は学修に適切な日数だったか、家族に会ったか、実施した看護技術、受け持ち患者の疾患・必要な看護・家族背景の理解、病棟実習の目標達成への実習日数減少による影響、複数の学生で患者を担当したことによる学修効果をたずねた。

4. データ分析方法

得られた量的データは、記述統計にて分析した。頻度の比較にはフィッシャーの正確確率検定を用いた。統計ソフトは R version 4.1.2 を使用し、データを探索的に分析するため有意水準は 10% とした。

5. 倫理的配慮

「コロナ禍による小児病棟実習方法の変更に関するアンケート」は授業評価の一環として、2020 年度小児看護学実習の受講生全員を対象に実施した。その際、アンケートの目的、匿名アンケートであること、回答は成績に影響しないこと、回答は強制ではないこと、学内外での公表時には個人を特定する情報を削除することを示し、アンケートに協力可能な者は画面を進め、協力できない者は画面を閉じるように指示した。また途中で回答をやめることも可能であることを明示した。

アンケートの分析結果を研究論文として公表することに関しては、研究者が所属する機関の倫理審査委員会の承認を得た (看護 03026)。学生にはポスター掲示で周知し、2020 年度の科目のため成績は既に評価済みの状態でデータ分析を開始していること、集計結果の中に個人を特

表1 小児病棟実習週の学生の動き

班	学生	担当 患者	月			火		水		木		金	
			9時～10時	10時～12時半	12時半～15時	15時～16時	8時～15時	15時～16時	8時～15時	15時～16時	8時～15時	15時～16時	
1	①	患児 A	オリエン テーション (学内)	病棟1日目	学内実習	カンファ レンス (学内)		カンファ レンス (学内)		学内実習		学内実習	
	②	患児 B				カンファ レンス (学内)		カンファ レンス (学内)		学内実習		学内実習	
	③	患児 C				カンファ レンス (学内)		カンファ レンス (学内)		学内実習		学内実習	
2	④	患児 A	オリエン テーション (学内)	学内実習	病棟1日目	学内実習		学内実習		病棟2日目		病棟3日目	
	⑤	患児 B				学内実習		学内実習		病棟2日目		病棟3日目	
	⑥	患児 C				学内実習		学内実習		病棟2日目		病棟3日目	

〈変則パターン1〉 学生が担当できる患者が2名しかいないため、学生②③・学生④⑤は病棟実習で学生2名で患者1名を担当する

班	学生	担当 患者	月			火		水		木		金	
			9時～10時	10時～12時半	12時半～15時	15時～16時	8時～15時	15時～16時	8時～15時	15時～16時	8時～15時	15時～16時	
1	①	患児 A	オリエン テーション (学内)	病棟1日目	学内実習	カンファ レンス (学内)		カンファ レンス (学内)		学内実習		学内実習	
	②	患児 B				カンファ レンス (学内)		カンファ レンス (学内)		学内実習		学内実習	
	③	患児 B				カンファ レンス (学内)		カンファ レンス (学内)		学内実習		学内実習	
2	④	患児 A	オリエン テーション (学内)	学内実習	病棟1日目	学内実習		学内実習		病棟2日目		病棟3日目	
	⑤	患児 A				学内実習		学内実習		病棟2日目		病棟3日目	
	⑥	患児 B				学内実習		学内実習		病棟2日目		病棟3日目	

〈変則パターン2〉 学生5名のグループのため、学生③はグループ内に同一患者を担当している学生がいない

班	学生	担当 患者	月			火		水		木		金	
			9時～10時	10時～12時半	12時半～15時	15時～16時	8時～15時	15時～16時	8時～15時	15時～16時	8時～15時	15時～16時	
1	①	患児 A	オリエン テーション (学内)	病棟1日目	学内実習	カンファ レンス (学内)		カンファ レンス (学内)		学内実習		学内実習	
	②	患児 B				カンファ レンス (学内)		カンファ レンス (学内)		学内実習		学内実習	
	③	患児 C				カンファ レンス (学内)		カンファ レンス (学内)		学内実習		学内実習	
2	④	患児 A	オリエン テーション (学内)	学内実習	病棟1日目	学内実習		学内実習		病棟2日目		病棟3日目	
	⑤	患児 B				学内実習		学内実習		病棟2日目		病棟3日目	

表2 「コロナ禍による小児病棟実習方法の変更に関するアンケート」の質問項目

Q1.	実習した病棟を回答してください。 A 病棟 / B 病棟
Q2.	病棟での実習（オリエンテーションを含め 2.5 日）は、学修に適切な日数でしたか。 十分だった / まあまあ十分だった / どちらともいえない / 十分でなかった / 全く十分でなかった
Q3.	学内での実習（2 日）は、学修に適切な日数でしたか。 十分だった / まあまあ十分だった / どちらともいえない / 十分でなかった / 全く十分でなかった
Q4.	小児病棟の実習で担当した患者は、グループの学生何名で受け持ちましたか。数字でお答えください。 （例：自分一人で受け持った場合は「1」と記載する。） （自由記載）
Q5.	Q4 で答えた人数のうち、病棟と一緒に受け持ったのは何名ですか。数字でお答えください。 （例：自分一人で受け持った場合は「0」と記載する。） （自由記載）
Q6.	実習中、受け持ち患者の家族に会いましたか。 会った / 会っていない / 分からない
Q7.	バイタルサイン測定で実施したものを全て選んでください。実施して、測定できなかったものも含んでよいです。 呼吸 / 心拍 / 体温 / 血圧
Q8.	病棟実習で実施したケアを全て選んでください。見学のみは含めないでください。 ベッドメイキング / シーネ交換 / 清拭 / 陰部洗浄 / 沐浴 / シャワー浴介助 / 口腔ケア / おむつ交換 / トイレ介助 / ストマケア / 浣腸 / 導尿 / 食事介助 / 哺乳介助 / 経管栄養作成 / 経管栄養注入 / 口鼻腔吸引 / 気管内吸引 / 吸入 / 軟膏処置 / 穿刺時の介助（採血、注射、腰椎穿刺など） / 病棟内でのリハビリ実施（術後の病棟内歩行を含む） / 遊びの提供（勉強と一緒にする、話し相手になる、を含む） / 上記以外のケアを実施した
Q9.	受け持ち患者の疾患の理解は… とても難しかった / まあまあ難しかった / どちらともいえない / そんなに難しくなかった / 全く難しくなかった
Q10.	受け持ち患者に必要な看護の理解は… とても難しかった / まあまあ難しかった / どちらともいえない / そんなに難しくなかった / 全く難しくなかった
Q11.	受け持ち患者の家族背景の理解は… とても難しかった / まあまあ難しかった / どちらともいえない / そんなに難しくなかった / 全く難しくなかった
Q12.	病棟実習日に複数の学生で受け持ったことは… とても学修効果があった / まあまあ学修効果があった / どちらともいえない / あまり学修効果がなかった / 全く学修効果がなかった / 病棟実習日に学生 2 名以上で患者を受け持たなかった
Q13.	自分が学内実習日に、別の学生が病棟に行き、自分の受け持っている児を担当したことは… とても学修効果があった / まあまあ学修効果があった / どちらともいえない / あまり学修効果がなかった / 全く学修効果がなかった / 自分が学内実習のとき、別の学生が病棟で自分の受け持ち患者を担当していなかった
Q14.	病棟実習が 2.5 日と例年に比べて少なかったことで、目標達成度が低くなった、努力が一層必要になったなどの影響がありましたか。目標ごとにお答えください。 目標 1：子どもと家族の病気体験と療養生活について関心を持ち、子どもの権利を尊重し、信頼関係を構築する とても影響した / ある程度影響した / どちらともいえない / あまり影響しなかった / 全く影響しなかった
Q15.	目標 2：子どもの成長発達を踏まえ、健康障害と日常生活へ影響を理解する とても影響した / ある程度影響した / どちらともいえない / あまり影響しなかった / 全く影響しなかった
Q16.	目標 3：子どもの健康障害と発達段階の特徴を考慮し、日常生活の援助を行う とても影響した / ある程度影響した / どちらともいえない / あまり影響しなかった / 全く影響しなかった
Q17.	目標 4：子どもの身体的・心理的苦痛を緩和し、安全に配慮した看護ケアを計画、実施、評価する とても影響した / ある程度影響した / どちらともいえない / あまり影響しなかった / 全く影響しなかった
Q18.	目標 5：子どもと家族の関係性を考慮し、子どもと家族が療養生活に主体的に取り組めるよう援助する とても影響した / ある程度影響した / どちらともいえない / あまり影響しなかった / 全く影響しなかった

下段は回答（選択肢）を示す。

定する情報が含まれないかよく確認し、該当する情報があった場合は削除して公表すること、本研究による学生の新たな負担はないことを説明した。

IV. 研究結果

1. 分析データの概要

回答があった84名のデータを分析対象とした。2020年度小児看護学実習の受講者98名に対する回収率85.7%であった。回答者の実習病棟は、A病棟36名(42.9%)、B病棟48名(57.1%)であり、受講者に対する回収率は、A病棟80%、B病棟90.6%であった。

2. 実習日数について

病棟及び学内での実習は学修が適切な日数だったか、5件法でたずねた結果を図1に示す。

病棟での実習日数は、「十分だった」29名(34.5%)、「まあまあ十分だった」19名(22.6%)、「どちらともいえない」22名(26.2%)、「十分ではなかった」13名(15.5%)、「全く十分ではなかった」1名(1.2%)であった。

学内での実習日数は、「十分だった」37名(44.0%)、「まあまあ十分だった」28名(33.3%)、「どちらともいえない」14名(16.7%)、「十分ではなかった」5名(6.0%)であった。「全く十分ではなかった」と回答した者はいなかった。

3. 実施した看護ケア

バイタルサイン測定は、呼吸と体温で各1名、血圧で2名が実施しなかったが、心拍は全員が

実施していた。

実施または見学した看護ケアを選択式複数回答でたずねた結果を図2に示す。10%以上が実施または見学できた看護ケアは、「遊びの提供(勉強や話し相手も含む)」64名(76.2%)、「おむつ交換」51名(60.7%)、「沐浴」27名(32.1%)、「清拭」18名(21.4%)、「食事介助」17名(20.2%)、「陰部洗浄」16名(19.0%)、「ベッドメイキング」13名(15.5%)、「軟膏処置」9名(10.7%)であった。「シーネ交換」「シャワー浴」「ストマケア」「浣腸」「導尿」「気管吸引」を実施又は見学できたと回答した者はいなかった。また、「いずれのケアも実施しなかった」と回答した者は1名であった。

4. 受け持ち患者の疾患・必要な看護・家族背景の理解

受け持ち患者の疾患・必要な看護・家族背景の理解を、5件法でたずねた結果を図3に示す。

疾患の理解は、「とても難しかった」20名(23.8%)、「まあまあ難しかった」53名(63.1%)、「どちらともいえない」6名(7.1%)、「そんなに難しくなかった」5名(6.0%)であった。「まったく難しくなかった」と回答した者はいなかった。

必要な看護の理解は、「とても難しかった」12名(14.3%)、「まあまあ難しかった」53名(63.1%)、「どちらともいえない」11名(13.1%)、「そんなに難しくなかった」8名(9.5%)であった。「まったく難しくなかった」と回答した者はいな

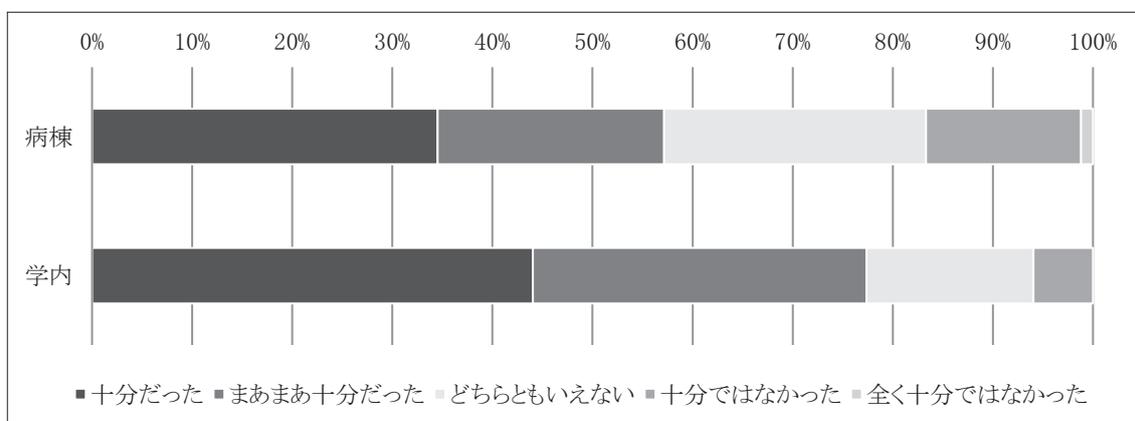


図1 実習は学修に適切な日数だったか

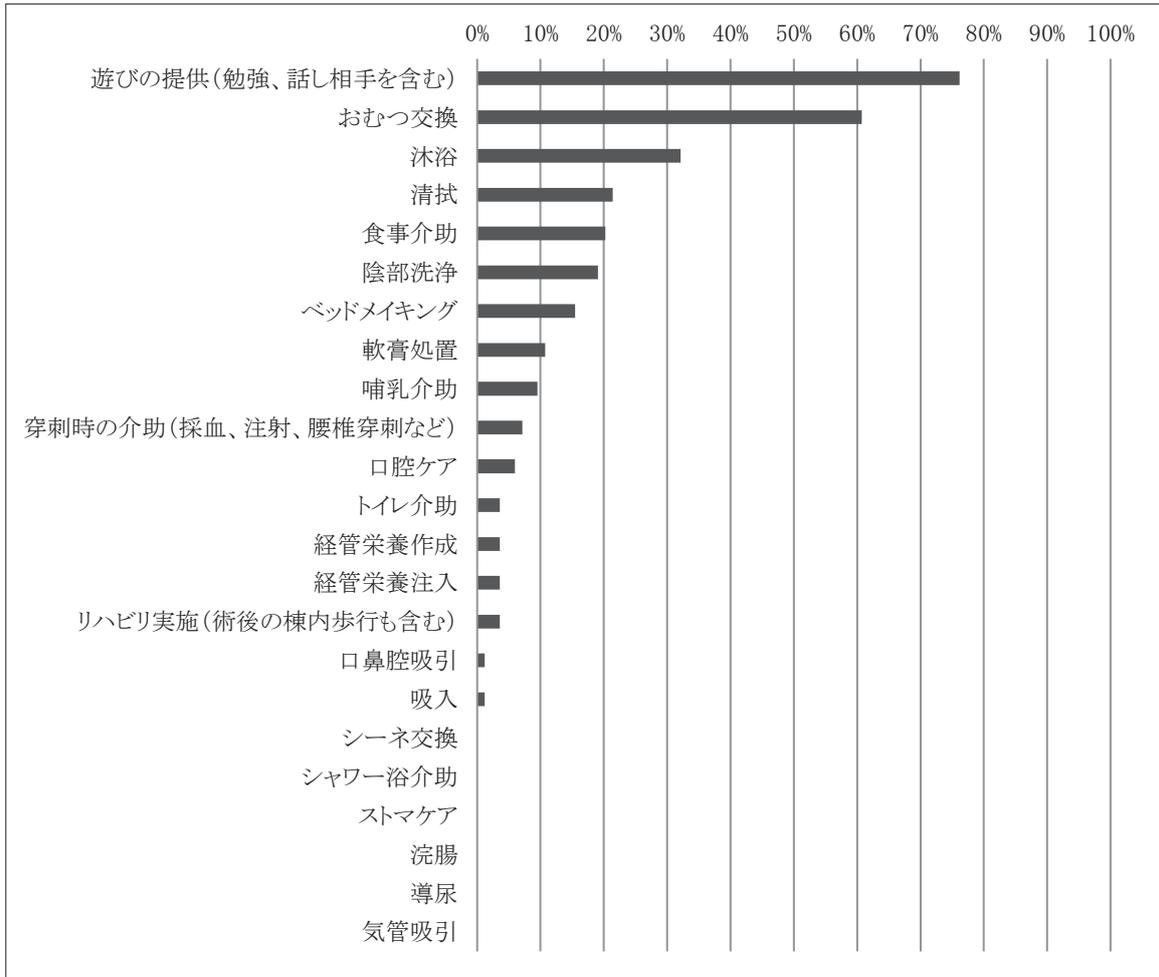


図2 実習で実施したケア

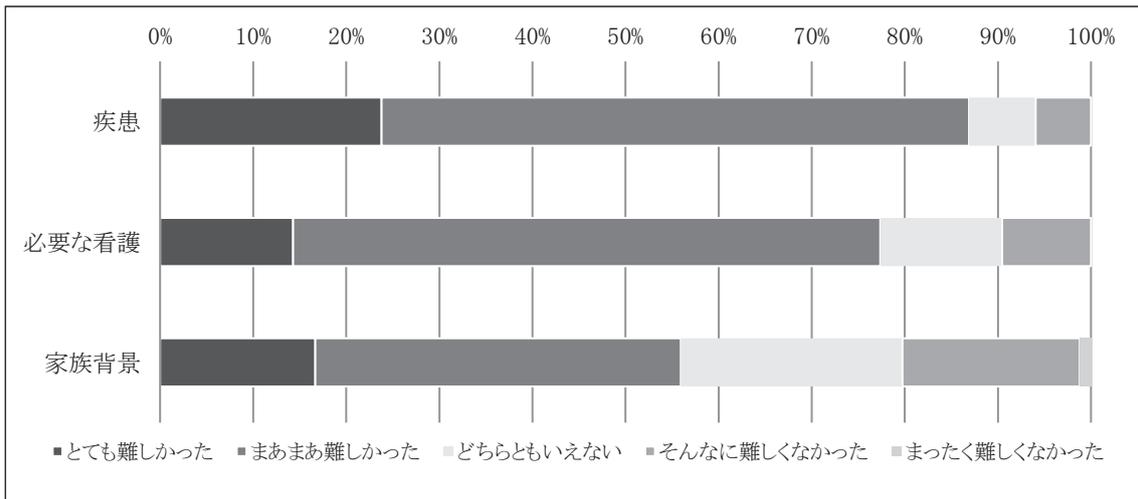


図3 受け持ち患者の疾患・必要な看護・家族背景の理解

かった。

家族背景の理解は、「とても難しかった」14名(16.7%),「まあまあ難しかった」33名(39.3%),「どちらともいえない」20名(23.8%),「そんなに難しくなかった」16名(19.0%),「まったく難しくなかった」1名(1.2%)であった。なお、実習中に受け持ち患者の家族に会ったと回答したのは37名(44.0%)であった。

5. 目標達成への影響

実習日数が例年に比べて少なかったことで、目標達成度が低くなった、努力が一層必要になったなどの影響があったかに関し、学生の意見を5件法でたずねた結果を図4に示す。

目標1「子どもと家族の病気体験と療養生活について関心を持ち、子どもの権利を尊重し、信頼関係を構築する」では、「とても影響した」12名(14.3%),「ある程度影響した」39名(46.4%),「どちらともいえない」15名(17.9%),「あまり影響しなかった」15名(17.9%),「全く影響しなかった」3名(3.6%)であった。

目標2「子どもの成長発達を踏まえ、健康障害と日常生活へ影響を理解する」では、「とても影響した」6名(7.1%),「ある程度影響した」32名(38.1%),「どちらともいえない」18名(21.4%),「あまり影響しなかった」22名(26.2%),

「全く影響しなかった」6名(7.1%)であった。

目標3「子どもの健康障害と発達段階の特徴を考慮し、日常生活の援助を行う」では、「とても影響した」7名(8.3%),「ある程度影響した」43名(51.2%),「どちらともいえない」13名(15.5%),「あまり影響しなかった」16名(19.0%),「全く影響しなかった」5名(6.0%)であった。

目標4「子どもの身体的・心理的苦痛を緩和し、安全に配慮した看護ケアを計画、実施、評価する」では、「とても影響した」11名(13.1%),「ある程度影響した」45名(53.6%),「どちらともいえない」11名(13.1%),「あまり影響しなかった」15名(17.9%),「全く影響しなかった」2名(2.4%)であった。

目標5「子どもと家族の関係性を考慮し、子どもと家族が療養生活に主体的に取り組めるよう援助する」では、「とても影響した」21名(25.0%),「ある程度影響した」33名(39.3%),「どちらともいえない」19名(22.6%),「あまり影響しなかった」8名(9.5%),「全く影響しなかった」3名(3.6%)であった。

6. 協働による学修効果

1) 学生の主観からみた学修効果(図5)

病棟実習と学内実習の学生がペアで患者を担

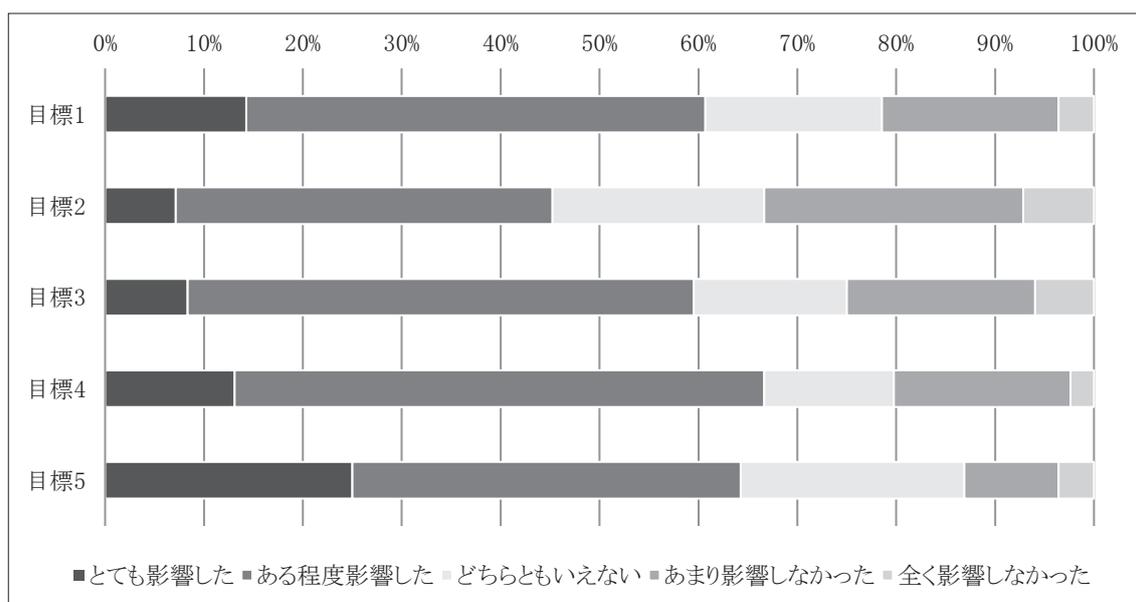


図4 実習目標達成の実習日数減少による影響

当したことによる学修効果について、「学内実習日に、他の学生が病棟実習で自分の患者を担当しなかった」と回答した8名を除いた76名の回答を集計した。「とても学修効果があった」27名(35.5%)、「まあまあ学修効果があった」35名(46.1%)、「どちらともいえない」9名(11.8%)、「あまり学修効果がなかった」5名(6.6%)であった。「まったく学修効果がなかった」と回答した者はいなかった。

また、表1〈変則パターン1〉に示すような、病棟実習で学生がペアで患者を担当したことによる学修効果については、「病棟実習日に複数の学生で受け持たなかった」と回答した35名を除いた49名の回答を集計した。「とても学修効果があった」22名(44.9%)、「まあまあ学修効果があった」18名(36.7%)、「どちらともいえない」7名(14.3%)、「あまり学修効果がなかった」2名(4.1%)であった。「まったく学修効果がなかった」と回答した者はいなかった。

2) 受け持ち患者の疾患・必要な看護・家族背景の理解および目標達成の影響への効果

グループ内に自分の担当患者を受け持つ学生がいた学生(協働学習群)73名(86.9%)といなかった学生(非協働学習群)11名(13.1%)を比較した結果、受け持ち患者の疾患・必要な看護・家族背景の理解、および実習目標達成の実習日数減少による影響に、有意な差は認められなかった(表3)。

病棟実習日にペアで患者を担当した学生(病

棟協働学習群)37名(44.0%)とそうでなかった学生(非病棟協働学習群)47名(56.0%)を比較した結果、家族背景の理解($p=0.060$)と、「目標5:子どもと家族の関係性を考慮し、子どもと家族が療養生活に主体的に取り組めるよう援助する」への影響($p=0.053$)において、二群間に有意な差が認められた(表4)。

V. 考察

1. 実習日数について

COVID-19 流行により、文部科学省と厚生労働省(2020)は「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」を発出し、新型コロナウイルス感染症の発生に伴い、学校養成所等における実習等の弾力的な運用について周知する事態となった。感染症流行下において実習受け入れを中止する医療機関も散見されたが、本実習では感染予防対策を講じた上で、臨地での実習を行えるよう実習施設と調整を続けた。その結果、日数短縮となったが、すべての学生が病棟で患者を担当する看護実習を行うことができた。

本調査結果では、病棟実習は学修に適切な日数かの問いに対し、57%が「十分だった」もしくは「まあまあ十分だった」と回答した。病棟実習が2日半に短縮されても十分に学修できたとする学生が半分を上っていたことは、我々の予想に反することであった。短時間でも、病棟

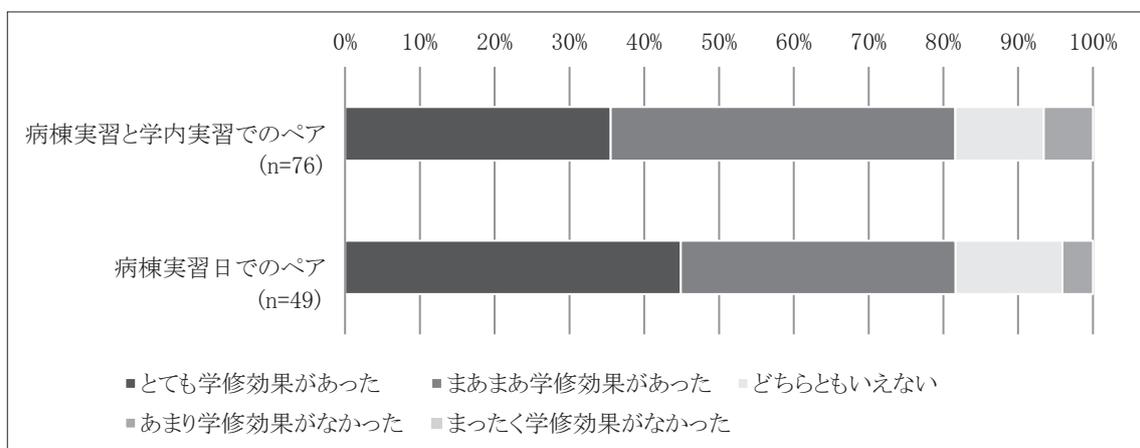


図5 学生の主観からみた協働による学修効果

表3 受け持ち患者の疾患・必要な看護・家族背景の理解への効果

		協働学習群 n=73	非協働学習群 n=11	p 値	病棟 協働学習群 n=37	非病棟 協働学習群 n=47	p 値
疾患	とても難しかった	19	1	0.15	10	10	0.92
	まあまあ難しかった	45	8		22	31	
	どちらともいえない	6	0		3	3	
	そんなに難しくなかった	3	2		2	3	
	全く難しくなかった	0	0		0	0	
必要な看護	とても難しかった	11	1	0.72	5	7	1.00
	まあまあ難しかった	46	7		23	30	
	どちらともいえない	10	1		5	6	
	そんなに難しくなかった	6	2		4	4	
	全く難しくなかった	0	0		0	0	
家族背景	とても難しかった	12	2	0.77	4	10	0.05*
	まあまあ難しかった	27	6		11	22	
	どちらともいえない	18	2		10	10	
	そんなに難しくなかった	15	1		11	5	
	全く難しくなかった	1	0		1	0	

注：フィッシャーの正確確率検定を用い，データを探索的に分析するため有意水準は10%とした。

*p<0.1

表4 実習目標達成の影響への効果

		協働学習群 n=73	非協働学習群 n=11	p 値	病棟 協働学習群 n=37	非病棟 協働学習群 n=47	p 値
目標1	とても影響した	11	1	0.28	5	7	0.96
	ある程度影響した	35	4		17	22	
	どちらともいえない	11	4		8	7	
	あまり影響しなかった	14	1		6	9	
	全く影響しなかった	2	1		1	2	
目標2	とても影響した	5	1	0.35	1	5	0.35
	ある程度影響した	30	2		14	18	
	どちらともいえない	14	4		11	7	
	あまり影響しなかった	18	4		8	14	
	全く影響しなかった	6	0		3	3	
目標3	とても影響した	6	1	0.76	1	6	0.48
	ある程度影響した	38	5		22	21	
	どちらともいえない	10	3		5	8	
	あまり影響しなかった	14	2		7	9	
	全く影響しなかった	5	0		2	3	
目標4	とても影響した	9	2	0.47	4	7	0.73
	ある程度影響した	41	4		19	26	
	どちらともいえない	8	3		4	7	
	あまり影響しなかった	13	2		9	6	
	全く影響しなかった	2	0		1	1	
目標5	とても影響した	19	2	0.88	5	16	0.06*
	ある程度影響した	29	4		14	19	
	どちらともいえない	15	4		11	8	
	あまり影響しなかった	7	1		4	4	
	全く影響しなかった	3	0		3	0	

注：フィッシャーの正確確率検定を用い，データを探索的に分析するため有意水準は10%とした。

*p<0.1

の中に身をおき、生身の患者と接する経験が学生にとってかけがえのないものとなることが示唆された。

学内実習は学修に適切な日数かの問いに対しては、77%が「十分だった」もしくは「まあまあ十分だった」と回答した。小児患者は入院期間が短く、病状の変化が早いことから、COVID-19 流行前は学内実習日を設けず、5日間連続で病棟実習を行っていた。そのため、学生は患者情報の整理が十分にできず、実践と理論を統合した学修が困難であった可能性が示唆された。今後は、病棟実習と学内実習を適切なバランスで組みこんでいく必要がある。

2. 実施した看護ケア

学生が最も実施していた看護ケアは「遊びの提供」76%であった。个人防护具の不足により、学生が使用できるのは2日半の実習期間を通じて1組としていた。そのため、学生は実施を希望する看護ケア技術を1つ選んで指導者に申告し、学内演習を経て、患者に実施することとした。多くの学生が「遊びの提供」を実施できたのは、个人防护具が不要なケアであったことが大きく影響していると考えられる。

次いで、学生が実施していたのは、「おむつ交換」61%であった。ケアの頻度が多く、見学の機会も多いことから、「1回しか」个人防护具を使ってケアできない学生にとって、安心感をもってできる看護技術だったと考える。その他の「沐浴」「清拭」「食事介助」といった日常生活援助、「軟膏処置」「経管栄養」「吸入」などの治療に関わる援助技術についても極めて低い実施率となった。なお、バイタルサイン測定の実施は、个人防护具の着用が不要であったこともあり、ほぼ全員が経験できていた。ただし、これらはいずれも、1回でも経験した看護技術の回答結果であり、ほとんどが1~2回の技術経験であると推測される。COVID-19 流行下で実習を行なった学生への、卒業前や就職後に看護技術の習得を目指して、丁寧に教育する体制が必要である。また、COVID-19により学内実習プログラムとなった小児看護学実習の学生の学びを調査した研究では、通常の臨地実習と比較し、「子

どもはマンシエット等、使用する道具が成人とは違う」「家族と関わる際と医療者が関わる際の子どもの反応は違う」「小児病棟には成人病棟にない工夫がある」の3項目について、学べたとする学生が少なかったことが明らかになっている(田中, 伊織, 日沼, 2021)。病棟での実習が短期間であったことを鑑み、これらの小児看護の特徴への理解に関しても確認していく必要がある。

3. 受け持ち患者の理解と目標達成度への影響について

受け持ち患者の疾患の理解について難しかったと回答したのは87%、必要な看護では77%、家族背景では56%だった。小児看護学実習で学生は、子どもを捉えること、子どもと関わること、子どもの特徴を捉えた看護援助、疾患による影響がある患児との関わり、家族への関わりに困難を感じている(山本, 上山, 2018)が、実習日数短縮となったことでより多くの学生が、患者を理解し、看護を展開することが難しいと感じていたと考える。しかし、家族背景に関しては難しいと回答した割合が低く、難しくなかったとの回答が20%であった。COVID-19 状況下では家族の面会が制限され、学生が直接対話できる機会も限られた。そのため、学生が家族背景に関心をもち理解できるよう、実習指導者や教員が家族に関する情報を補足的に説明していた。また、病棟に家族の存在はないものの、患者が身につけている衣服やタオルなどが子どもに適した可愛らしい柄で、きれいに畳まれて置かれていることから、家族とのつながりや愛情を感じ取ろうとしている様子もあった。このように実習指導者や教員の積極的な指導が臨床場面での経験と結びついたことが、他の2項目よりも理解が難しかったとする学生が少なかった理由であると考えられる。受け持ち患者の疾患や必要な看護についても、学生の理解が進むように実習指導者や教員が関わり、既存の知識と統合できるように指導していく必要が示唆された。

目標達成への影響については、目標2「子どもの成長発達を踏まえ、健康障害と日常生活へ

影響を理解する」で影響したとの回答は45%であり、5項目中、最も少なかった。しかし、目標1「子どもと家族の病気体験と療養生活について関心を持ち、子どもの権利を尊重し、信頼関係を構築する」と目標3「子どもの健康障害と発達段階の特徴を考慮し、日常生活の援助を行う」ではそれぞれ60%、目標4「子どもの身体的・心理的苦痛を緩和し、安全に配慮した看護ケアを計画、実施、評価する」では67%、目標5「子どもと家族の関係性を考慮し、子どもと家族が療養生活に主体的に取り組めるよう援助する」では74%が影響したと回答し、COVID-19の影響による実習日数の短縮が学生の学修に強く影響を及ぼしたことが明らかとなった。学内実習が2日半となったことで患者理解やアセスメントを考える時間が確保され、目標2への影響は比較的少ないという結果につながったと考える。しかし、病棟実習日数が短く、半数の学生は学内実習の前に病棟実習を行うスケジュールであったことから、立案した看護計画に基づき支援したという実感が得られにくく、目標1, 3, 4の目標達成に影響したとする学生が多かったと考える。特に、目標5の家族関係を踏まえた援助に関しては、カルテや医療者からの情報収集によって家族背景や患者と家族を取り巻く状況を理解できたものの、面会制限によって家族と接触する機会が少なく、学生の学習の実感につながらなかった可能性がある。

4. 協働学習の効果

病棟実習と学内実習の学生がペアで患者を担当したことは、病棟実習で学生がペアで患者を担当したことは、共に82%が学修効果があったと回答した。病棟実習の日数が短縮された中で、学生が協働して学習することは一定の効果があったといえる。

病棟実習と学内実習でのペア学習では、患者の理解度や、実習目標達成の影響度に有意な差は認められなかった。一方、病棟実習でのペア学習では、家族背景の理解度と、目標5「子どもと家族の関係性を考慮し、子どもと家族が療養生活に主体的に取り組めるよう援助する」への影響度において有意な差が認められた。家族

背景や患者家族関係を理解することは、小児看護学実習の中でも高度な目標に位置づけられる。病棟でのペア学習により、学生同士で相談しながら情報収集し、一人では気づかなかった新たな視点で、家族への看護を捉えることができたと考えられる。

実習では、学生が少人数のグループを形成し、共通の目標と環境の中で学習を進める。その中で協働学習を取り入れ、教え合い・学び合うことでの効果が期待される。小児看護学実習でペアで患者を受け持つことは、指導者・教員との関係性、学生間関係性、ケアの質、学習意欲、学習や看護の深まりにより影響がある一方で、意見が言いづらい、ペアの学生任せになる、看護技術習得が不十分になる、ペアの学生に劣等感を持つ、ペアと比較されるプレッシャーがあるといった欠点もある（古屋, 西田, 川口, 2019, 林, 齊藤, 石井, 川口, 西田, 2018）。実習指導者・教員側の視点として、ペア間関係性に悩み（古屋, 西田, 齊藤, 林, 込山, 2021）、技術経験や指導が公平になるよう心がける、子どもにとって良い援助を学生同士が考えを出し合えるようにする、お互いを尊重し合える関係をつくるといった、ペアで実習を行うこと特有の指導上の配慮が明らかであり（佐藤, 堀田, 2019）、実習指導者や教員のより一層の教育力が問われる方法でもある。うまく機能すれば、子どもと関わる原動力となり、子どもを多角的に理解し、子どもとの関係性を深める方法や良いケアを追究するといった、協働学習が促進されることによる効果も期待される（佐藤, 小村, 堀田, 2018）。少子化のため、本実習においても学生数と同じだけの小児患者数を確保できず、今後もペア実習を行うことが想定される。ペア実習のメリット・デメリットを考慮し、実習指導者と教員が連携し、学生の協働学習を促進する指導方略を考える必要がある。

5. 本研究の限界と課題

本調査は、臨地実習が長期的に制限される未曾有の事態を、学生の視点から評価する必要を感じ、急遽準備したアンケートによるものである。そのため、設問や回答選択肢の吟味は十分

ではない。COVID-19 流行前は、小児看護学実習における学習状況の調査を行っていなかったため、流行前後での比較ができておらず、COVID-19 流行下の現状把握にとどまり、本研究結果が COVID-19 流行による影響であるのか、その他の要因もあるのかは明らかではない。また、協働学習による効果について述べたが、学生複数で同一患者を受け持っている者を協働学習群とした群間比較の結果であり、これらの学生が実際に協働学習を行っていたかの確認はできていない。

VI. 結語

本研究では、COVID-19 流行後の初年度となった 2020 年度、臨地実習に制限が生じた中で小児看護学実習を経験した看護学生の実習状況をアンケート結果から把握し、実習での看護技術の実施、患者の理解、実習目標の達成への影響を明らかにした。学生がペアとなって同一の患者を担当し、協働して学修する方法は一定の効果を得た。

本調査結果を踏まえ、感染拡大前は 5 日間連続で行っていた病棟実習を見直した。2021 年度の小児看護学実習は、感染状況がやや落ち着いたこともあり、全ての学生が病棟実習を 4 日間行えるように調整した。そして、学内実習日を 1 日設け、学生の求めに応じて、教員が看護過程の展開などの個別指導にあたるようにしている。小児看護学実習では、少子化による小児の入院患者数の減少により、学生 2 名で患者 1 名を担当することが常態化しているが、このことでの学習効果も期待できると考え、協働での学習を教員から促すようにしている。このように、COVID-19 流行によって実習日数の変更を余儀なくされた小児病棟での実習であったが故の知見も得ることができた。文部科学省は「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習のあり方に関する有職者会議報告書」の中で、臨地実習の実現、臨地以外の代替とした場合の教育の質の維持、臨地実習ができた学生間とそうでない学生との修学内容の格差、臨地実習が叶わなかった際の教育力の向上を課題と

して挙げている（文部科学省，2021，pp.5-6）。COVID-19 収束の見通しは未だ立っておらず、今後も新興感染症など臨地実習が困難な状況に備え、教育の工夫と評価を継続していきたい。

謝辞

アンケートにご協力くださった 2020 年度獨協医科大学看護学部 3 年生の皆様へ深く感謝申し上げます。

文献

- 中央教育審議会(2012.8.28). 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申)
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (参照 2022.3.15.)
- 古屋千晶, 西田みゆき, 川口千鶴. (2019). 小児看護学実習におけるペア実習について学生が認識した利点と欠点. 順天堂大学医療看護学部医療看護研究, 23, 32-40.
- 古屋千晶, 西田みゆき, 齊藤麻子, 林亮, 込山洋美. (2021). 小児看護学実習における指導マニュアルを活用したペア実習指導の実践. 医療看護研究, 18, 86-95.
- 林亮, 齊藤麻子, 石井くみ子, 川口千鶴, 西田みゆき. (2018). 小児看護学実習におけるペア実習に対する学生の評価. 順天堂大学保健看護学部順天堂保健看護研究, 6, 34-41.
- 松下佳代編著 (2015). ディープアクティブラーニング 大学の授業を進化させるために. 勁草書房, p114.
- 文部科学省 初等中等教育局情報教育・外国語教育課 (n.d.). 学びのイノベーション事業.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1408183.htm (参照 2022.3.15.)
- 文部科学省初等中等教育局・高等教育局, 厚生労働省医政局・健康局・医薬・生活衛生局・社会・援護局・社会・援護局・障害保健福祉部 (2020.6.1.). 「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校, 養成所及び養成施設等の対応について」

- https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (参照 2022.3.14.)
文部科学省 (2021.6.8.). 「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習のあり方に関する有識者会議報告書～看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について」
https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf (参照 2022.3.15)
日本看護系大学協議会 高等教育行政対策委員会 (2020.9.5.). 2020 年度看護系大学 4 年生の臨地実習科目 (必修) の実施状況 調査結果報告書.
<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/09/202009koutoukyouiku-houkokusyo.pdf> (参照 2022.3.15.)
- 佐藤朝美, 小村三千代, 堀田昇吾. (2018). ピア・ラーニングを活用した“ペア受持ち制”小児看護実習における学生の体験. 日本小児看護学会誌, 27, 73-82.
- 佐藤朝美, 堀田昇吾. (2019). ピア・ラーニングを活用した「ペア受持ち制」小児看護実習指導の視点. 横浜看護学雑誌, 12(1), 36-41.
- 田中さおり, 伊織光恵, 日沼千尋. (2021). 学内実習プログラムで実施した小児看護学実習における学生の学び. 天使大学紀要, 21(2), 15-31.
- 山本裕子, 上山和子. (2018). 看護学実習の困難とその対策に関する文献検討. 新見公立大学紀要, 39, 163-169.